

まなびやまと

《国際教育の推進》

わかるつかえるたのしめる よまとプレクラスがスタート

来日したての子どもたちが、安心して学校生活が送れるように、平成30年度より「よまとプレクラス」が開設されました。日本語教育アドバイザー（以下、アドバイザー）が中心になって、日本での日常生活や学校生活への適応指導及び日本語の初期指導を行います。4週間限定のプログラムが組まれ、学習進度が同程度の子どもたちが集まり、学習を進めます。



5月17日(木)の参加者は、小・中学生3名でした。子どもたちは皆、この半年以内に諸外国から来日したばかりで、年齢も違います。「形容詞」の学習では、アドバイザーが絵カードを使い、「大きい・小さい」という言葉の意味を説明した後、子どもたちが、アドバイザーのかばんと自分のものを見比べて、「私のかばんは大きい」と答えました。次に手の大きさを、その次はペンケースをと、ア

ドバイザーが身の回りのものについて同じように何回か質問を行った後、子どもたち同士でも質問し、答えていました。



さらに、同様に「熱い・冷たい」など他の言葉でも行つとともに、同じ「あつい」でも「暑い・寒い」「厚い・薄い」があるという点にも触れていました。アドバイザーが常に短い言葉でわかりやすい話し方を心掛け、手本として最初に発声するため、子どもたちは安心して活動に参加していました。

また、手を重ねて叩くゲームでは、叩かれたアドバイザーが「痛い。痛かった」と言ったことをきつかけとして、「痛かった」「痛くない」といった言葉の変化について学んでいました。その他にも、保冷剤を手に当てて「冷たい」、お茶のカップを触って「熱い」など、体感と言葉を結びつけて学んでいました。

プリントの課題では、アドバイザーが教えるだけでなく、子どもたち同士でも教え合っていることについて、「子どもたちが学ぶことを楽しめるような『しかけ』を常に考え、身近なものを教材にしたり、学んだ内容



とによって、横のつながりをつくる力も育まれるとのことでした。

「プレクラスの目標は、『子どもたちが日本語を見て・聞いて・わかって・使えるようになること』、『日本で生活ができるようになること』、『教科学習に参加できるようになること』です。そのために、日常生活用語や学習用語はもちろん、自分の思いを伝えたり相手のことを理解したりといった、気持ちのやりとりができるようにしてあげたいです」と話すアドバイザーの温かい思いが、子どもたちの居場所としてのプレクラスを支えているのだと感じました。

今後も来日した子どもたちが笑顔で過ごせるよう、支援を行っていきます。

よまとプレクラス

* ベテルギウス3階多目的室

* 午前9時半～11時半



地域とともに児童を育てる
 ～福祉体験教室の取組み～
 大和市立桜丘小学校

9月10日(月)、桜丘小学校で4年生を対象にした、「福祉体験教室」が実施されました。この日は、大和市社会福祉協議会、桜丘地区社会福祉協議会、桜丘地区民生児童委員の皆さんなど、総勢18名が講師役や体験の補助役としてボランティアで来校しました。

講師の1人で、自身も視覚障がいのある石田さんは、平成23年から毎年桜丘小学校に来て、視覚障がいの方への支援の仕方を教えてくれます。

〈説明と質問タイム〉

子どもたちは事前に簡単なアイマスク体験をしているため、興味津々の様子で石田さんの説明を聞き、「買い物はどのようにしているのですか」「辛かったですか」など、視覚障がいの方の日常生活から思いに関わることで、様々な質問をしていました。「皆さんが



を使って得る学びとは異なる、体験学習ならではの良さが感じられました。



思っているより、意外と困っていないんですよ」といふ石田さんの返事に驚く子どもたちの様子からは、本

〈体験活動に挑戦!〉

子どもたちの体験活動は、2人1組で行われました。1人がアイマスクと白杖で2度目の視覚障がい体験、もう1人が支援する側の体験をし、歩行コースを一巡したら役割を交代します。コースには段差があり、簡単に進むことはできません。子どもがけがをすることのないよう、ボランティアの皆さんがコースの間や体験するペアの横につき、サポートをします。



説明を聞いた際には「できな」と言っていた子どもたちでしたが、アイマスクをつけてスタートすると、やはり徐々に歩くスピードが落ちていきます。誘導役の子どもも、自分の立ち位置やペアの相手への声かけの仕方

に戸惑い、苦戦していました。しかし、ボランティアの皆さんに助けられ、全てのペアがゴールまでたどり着くことができました。

〈感想の交流〉

体験後、子どもたちからは、「歩くのが大変だったけど、これを石田さんは普通だと思っていたなんて驚いた」「教えるのが難しかった。目が見えない人が転んじゃったらどうしよう」と、怖かったといった感想が出されました。それを聞いた石田さんは、「年をとってから、だんだん目が悪くなる人もいます。相手が困っているのを感じ取り、『どう手助けすればいいですか』と聞き、その都度相手を知っていくことが大切です。そして、伝える方も、『助けて』と言える。それが、皆が幸せになれる近道かなと、皆さんの話を聞いて思いました。これは、目の不自由な人たちだけではなく、皆に共通のことだと思えます」と、自らの思いを伝えました。

最後に、盲導犬についての講演会と歩行デモンストラクションを行い、福祉体験教室は終了しました。体験の感想を子どもにも聞くと、「盲導犬がいると、目が不自由な人の行動が



変わることに、盲導犬がとても助けになっているという話を初めて知りました」「補助の大変さと、声をかけることの大切さを知りました。学んだことを、今後生かしていきたいです」と話してくれました。

〈地域と学校と〉



この体験教室は、桜丘地区社会福祉協議会の年間計画の1つとしても位置付けられており、「地域と学校とが協力して子どもたちを育てたい」と会長の田村さんは思いを話してくれました。

「福祉って何だろう?」と田村さんが投げかけると、「みんなが幸せになること」と子どもたちは答えました。地域と学校とが連携して届けた「当事者の生の声」を、子どもたちは真剣に聞いていました。そこには、体験を通して様々なことを感じ、考えるという学びの姿がありました。

「働く」を考える ～通年で取り組むキャリア教育～

大和市立草柳小学校



草柳小学校では、「子どもたちが未来に向けて希望と意欲を持って進めるように」との願いを込め、5年生が年間を通して「キャリア教育」に取り組んでいます。

1学期は、図書資料を活用し、子どもたち1人ひとりが興味を持った仕事について調べました。

2学期には、仕事に携わる人から直接話を聞けるよう、講師を招いての授業が行われました。

〈出前授業で得る学び〉

10月18日(木)に、講師としてANA(全日本空輸)の職員10名、講師9名、コディネーター1名が来校しました。子どもたちは体育館で最初の説明を受けた後、各自が事前を選択していた5職種に分かれ、講師の話聞き、職業体験をしました。「パイロット体験」では、飛行機の空港への到着時刻と機体の

揺れ方の両方を考慮しながら飛行時の高度を考えたり、管制官との交信に挑戦したりしました。「キャビンアテンダント体験」では、様々なお客様へのサポートの仕方や、ライフベスト着用の説明に挑戦しました。



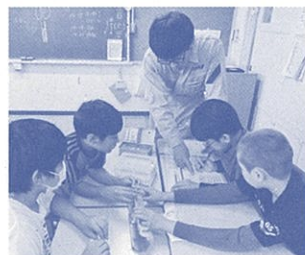
「整備士体験」では、本物の部品を使って点検作業を行いました。「グラウンドスタッフ体験」では、機内に持ち込めない手荷物について、お客様にどのように伝えればよいかを、お客様目線でご案内しました。「グラウンドハンドリングスタッフ体験」では、体育館のスクリーンに映る映像に合わせて、マシーナリ(離発着時の飛行機に合図を送る係)として飛行機の誘導に挑戦しました。

各体験が終わると、再度体育館に集まり、違う職業を体験した5人の子どもたちが1グループとなって、互いの



学びを伝え合います。誰もが進んで話し、時間が足りなくなるほどでした。全体でのまとめの時間、そこには自分の仕事について熱心に語る講師の方々と、その姿を尊敬や憧れに満ちた表情で見つめる子どもたちの姿がありました。授業後に感想を聞くと、「お客さんだけでなく、仲間を大切に思う仕事だと思った。1人ではうまくいかないことも、みんなやるとうまくいくと思うので、友だちを頼りたい」と思った。「チームスピリットを大切にしよう」というANAの考え方は、学校でも大切だと思った。想像と違って、知らないことがたくさんあった。これから、いろいろな仕事を見ていきたいなど、様々な声がかれました。

草柳小学校では、これ以降も、国立天文台の職員や保護者など、様々な立場・職種の方々による出前授業が行われました。このような学びを積み重ねる中で、自ら身近な大人にインタビューをし、わかったことをまとめて発表をする子どももいました。担任の先生は、「活動を進めるにつれ、仕事を「身近なこと、将来のこと」として見る目が子どもたちの中に育ち始めているのを感じています」と



話してしました。子どもたちの夢は、ますます広がりを見せているようです。

「働く」を考える

～中学校でのキャリア教育～
大和市立渋谷中学校



大和市立渋谷中学校では、全校でキャリア教育を行っています。渋谷中学校では、12月7日(金)、1年生に職業講話が行われました。来校したのは消防士、調理師、スポーツインストラクター、美容師、旅行会社スタッフ、幼稚園教諭です。子どもたちは、興味のある職業をいくつか選び、講話や体験活動を通して様々な職業や職業生活への理解を深めました。

担当の先生は「この後、2年生で数日間の職場体験を通して自己の進路についての考えを深め、3年生での進路決定に生かします。将来の夢や希望の実現に向けて、意欲を持って頑張ってください」と話してくれました。各中学校において、子どもたちが夢を持つよう、地域や学校の特色に応じた様々な取り組みが行われています。

町のすてきな人たちが

学ぼう

大和市立緑野小学校

緑野小学校では、「地域に根ざした緑野カリキュラム」というテーマで校内研究に取り組んでおり、2年生の生活科では、公園や公共施設など、町の素敵な場所や、町のみんなのために活動している素敵な人々について、学んでいきます。

◆旗振りボランティアの方から学ぶ



インタビューの様子

子どもたちの下校時に、学校の門の近くで見守る旗振りボランティアの方を学校にお招きし、インタビューに答えました。旗振りをしている理由は、「子どもたちの安全を守りたいから」だとわかりました。下校時に会う子どもたちを、「みんな自分の孫のように思えます」と話してくださるボランティアの方から、地域の方々の思いを学ぶことができました。

◆掃除ボランティアの方から学ぶ



公園の掃除の様子

学校の近くの宇都宮記念公園をボランティアで掃除している方々は、十数名で、活動は毎月1回です。秋が深まる頃は、たくさんの落ち葉で掃除が大変になるので、2年生も一緒に掃除をすることにしました。普段の掃除で集まる落ち葉は、30袋ほどですが、2年生と一緒に掃除をすると、100袋も集まりました。子どもたちは、町のみんなのためにすることができ、とても満足した様子でした。掃除後の、子どもたちからボランティアの皆さんへのインタビューでは、「子どもや公園に来る人たちが安全に楽しく遊べるように、公園の掃除をしてくださっていることがわかりました。地域の方々が町のみんなを大切に思う気持ちに触れて、子どもたちは、安全を守るう、公園を大切にしよう」という思いを持つことができました。今後も、地域の皆さんのお力をお借りして、地域を大切にしようと思えるような心に残る学習活動に取り組んでいきたいと思えます。

地域との温かい絆づくり

「ばあば」に学ぶ

ふるさと料理の会
大和市立下福田中学校



2月3日(日)、下福田中学校の家庭科室において「ばあば」に学ぶふるさと料理の会が開かれました。平成26年に始まったこの会は、企画・準備・運営などを学校と地域が協力して進めています。11回目である今回の参加者は42名で、就学前の子どもから小・中学生、教職員、地域の方々など、様々な人が集まりました。メインメニューは、節分にちなんで「恵方巻(太巻き寿司)」です。この会の立ち上げから世話人として携わる関水さんと齋藤さんは、「材料は、できる限り地産にこだわっています」と話してくれました。「地域に根ざした料理を地域の食材で作って食べることで、食べ物の本当の味を知ってほしい」との願いからです。作り方は、地域在住の「ばあば」たちが教えます。そこには、「世代間交流を深めることで、子どもたちも含めた地域としての繋がりを作っていききたい」との思いも込められています。

緊張した雰囲気でしたが、「ばあば」たちの楽しそうな笑い声があたりをこちらから聞こえてくると、子どもたちにも笑みが浮かび、温かい雰囲気へと変わりました。



この会への参加が2回目という中学1年の生徒は、「部活動の先輩の勧めで参加しました。知らない人に教わるのは緊張しましたが、ばあばたちが明るく接してくれて、安心しました。いつも作らない料理が作れるのも嬉しいです」と話してくれました。「地域の人には地域の人としての役割があると思います」という世話人お2人の言葉に、西館校長は、「地域が学校とともに子どもを育てよう」という意識で活動をしてきている。子どもたちが、地域の一員としての自覚を持って「ミニユニティに参加できるようにしよう、今後も地域の方たちと一緒に考えていきたい」と、その思いを話してくれました。

「まなび やまとは、開かれた教育行政の一環として、保護者、市民、教職員向けに、本市における各学校の教育活動や教育委員会の事業を、具体的にお知らせしようとするものです。お読みいただき、ご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いです。〈お問い合わせ〉 大和市教育委員会 指導室260-5210 教育研究所260-5213